



環境移行ガイド

目次

1 章	はじめに	4
1.1	前提条件	4
1.2	環境移行時の注意事項	4
2 章	事前確認	5
2.1	移行先環境の確認	5
2.2	環境移行と併せてバージョンアップを行う場合の確認	6
2.3	利用中のコンポーネントの確認	6
2.4	サーバ移行機能で移行可能な設定情報の確認	7
2.5	サーバ移行機能で移行できない設定情報の確認	8
2.6	リポジトリDBの使用有無の確認	8
3 章	環境移行作業	9
3.1	環境移行作業の流れ	9
3.2	リポジトリDB無し環境の移行作業	10
3.2.1	現環境で設定情報のエクスポートを行う	10
3.2.2	現環境で管理DBのエクスポートを行う	14
3.2.3	移行先環境に本製品のインストールを行う	14
3.2.4	移行先環境の本製品にライブラリのインストールを行う	14
3.2.5	移行先環境の本製品に各種設定および各種データの移行を行う	15
3.2.6	移行先環境の本製品にその他設定の移行を行う	15
3.2.7	移行先環境の管理DBにデータの移行を行う	16
3.2.8	移行先環境の管理コンソールを起動する	16
3.2.9	移行先環境の本製品を起動する	16
3.2.10	移行先環境の本製品に設定情報のインポートを行う	16
3.3	リポジトリDB有り環境の移行作業	20
3.3.1	トリガーの停止が行える場合	20
3.3.2	トリガーの停止が行えない場合	21
3.4	リポジトリDB無し環境の移行作業（併せてバージョンアップを実施）	22

3.4.1 現環境でグローバルリソースの一覧を記録する	22
3.4.2 現環境で設定情報のエクスポートを行う	22
3.4.3 現環境で管理DBのエクスポートを行う	23
3.4.4 移行先環境に本製品のインストールを行う	23
3.4.5 移行先環境の本製品にライブラリのインストールを行う	23
3.4.6 移行先環境の本製品に各種設定および各種データの移行を行う	23
3.4.7 移行先環境の本製品にその他設定の移行を行う	23
3.4.8 移行先環境の管理DBにデータの移行を行う	23
3.4.9 移行先環境の管理コンソールを起動する	23
3.4.10 移行先環境の本製品を起動する	24
3.4.11 移行先環境の本製品に設定情報のインポートを行う	24
3.4.12 移行先環境の本製品でグローバルリソースの再作成を行う	24
3.4.13 移行先環境の本製品でODBC接続関連の確認を行う	24
3.5 リポジトリDB有り環境の移行作業（併せてバージョンアップを実施）	25
3.5.1 トリガーの停止が行える場合	25
3.5.2 トリガーの停止が行えない場合	25
4章 動作確認	26
4.1 管理コンソールの動作確認	26
4.2 本製品の動作確認	26
5章 トラブルシューティング	27
5.1 移行作業中に発生する問題	27
■ ユーザ情報のインポートに失敗する	27
■ 移行先環境へデータを移行後、特定のグローバルリソースが表示されない	27
■ 移行先環境へデータを移行後、特定のプロジェクトが表示されない	27
■ 移行されたプロジェクト内容が異なる	27
■ 製品が起動しない	27
■ データ移行時、マウントのインポートに失敗する	27

1章 はじめに

1.1 前提条件

この資料は、バージョン 1.6.0 の DataAnyware 2.0 (以下、本製品と記述) を現在ご利用中のサーバー(以下、現環境と記述)から、新しいサーバー(以下、移行先環境と記述)に移行するための作業を記述しています。

この資料の内容に沿って作業を行っていただければ、現環境で作成したデータを、引き続き移行先環境でご利用いただけます。

この資料を最後までお読みになってから、作業を始めてください。

1.2 環境移行時の注意事項

本製品では、特別な記載が無い限り、移行に伴うプロジェクトやトリガーの動作の互換性を保証しますが、グローバルリソースや使用するライブラリの変更を実施する場合、その変更に伴う接続先の動作変更についてはこの限りではありません。

移行に際し、グローバルリソースや使用するライブラリの変更を実施する場合、移行作業前に動作検証の実施を行うことを推奨します。

この資料を用いた本製品の移行作業においては、本製品が参照するミドルウェアそのものや、ODBC データソースの移行については記載しておりません。移行を行う場合には、各ミドルウェアが推奨する移行手順にしたがって実施してください。

本製品のサーバとクライアントは同一のバージョンである必要があります。そのため、環境移行と併せてバージョンアップを行う際には、サーバとクライアントは同時にバージョンアップしてください。クライアントを異なるバージョンのサーバに接続した場合、モジュールの不整合が発生し、再インストールが必要になります、ご注意ください。

本製品では、上位バージョンへのバージョンアップのみをサポートしています。下位バージョンへのバージョンダウンはサポートしておりません。また、リポジトリ DB も同様に上位バージョンで利用したものを、下位のバージョンで利用することはできません。

2章 事前確認

この章では、環境移行前に確認が必要な事項を示します。

2.1 移行先環境の確認

移行先環境の OS の種類によっては現環境と同じバージョンの本製品の導入を行えない可能性があります。

そのため、現環境でご利用中の本製品が移行先環境に対応するバージョンであるかについて、以下の表をご確認ください。

DataAnyware 2.0 の導入環境と対応バージョン

導入環境	対応バージョン
Windows Server 2016	1.6.0 以上
Windows Server 2012 R2	1.4.0 以上
Windows Server 2008 R2	1.3.0 以上
Windows Server 2008	1.2.0 以上

現環境において、移行先環境の OS が対応していないバージョンの本製品をご利用中の場合には、環境移行と合わせてバージョンアップを行う必要があります。

上記のケースに当てはまらない場合には、「2.4 サーバ移行機能で移行可能な設定情報の確認」に進んでください。



移行先環境に新規に本製品を導入する際には、該当するバージョンの製品メディアが必要となります。

該当するバージョンの製品メディアをお持ちでない場合には、弊社ヘルプデスクまで問い合わせをお願いいたします。

弊社で確認後、環境移行用の製品メディアを送付させていただきます。

2.2 環境移行と併せてバージョンアップを行う場合の確認

移行先環境が対応していないバージョンの本製品をご利用中の場合には、対応するバージョンへバージョンアップを行う必要があります。

環境移行およびバージョンアップを行う方法として、以下のいずれかを選択してください。

- ・ 方法 1：現環境でバージョンアップを実施してから移行する（推奨）
- ・ 方法 2：現環境でバージョンアップを実施せずに移行する

推奨されるのは方法 1 となりますが、V1.6.0 からバージョンアップ手順の中に既存製品のアンインストールが含まれるため、並行運用後に切り替える等の理由により現環境に変更を加えられない場合には、方法 2 を選択してください。

方法 1 を選択する場合、現環境で利用されている本製品のバージョンによっては、段階的なバージョンアップを実施する必要があります。

段階的なバージョンアップの詳細およびバージョンアップ用モジュールの取得については、弊社サポートサイトをご確認ください。

2.3 利用中のコンポーネントの確認

現環境でご利用中の本製品において、バージョンアップ後にサポート対象外となるグローバルリソースが存在するか確認してください。

該当するグローバルリソースが存在する場合、サポートされているグローバルリソースへの移行が必須となります。

グローバルリソースの移行は、同名の[接続名]のグローバルリソースを作成することで行います。

既存のグローバルリソースのプロパティ[接続名]をメモ帳などに記録し、グローバルリソースの削除を行った後、サポート対象となっているグローバルリソースを同じ[接続名]で新規作成してください。

現環境でバージョンアップ後にサポート対象外となるグローバルリソースの再作成が行えない場合には、バージョンアップ後の本製品において全てのグローバルリソースを再作成する必要があります。

V1.6.0 よりサポート対象外となったコンポーネント

コンポーネント名	バージョン
DB2 for i	6.1
SQL Server	2005
PostgreSQL	9.1

V1.5.0 よりサポート対象外となったコンポーネント

コンポーネント名	バージョン
Access	2003
Oracle	11g
DB2	9.1 , 9.5
DB2 UDB iSeries	5.4
PostgreSQL	8.2 , 8.3 , 8.4 , 9.0
Lotus Domino	7.0 , 8.0

2.4 サーバ移行機能で移行可能な設定情報の確認

現環境においてリポジトリ DB を使用していない場合には、サーバ移行機能を使用することにより、以下の設定情報をエクスポートできます。

設定名	備考
ユーザアカウント/グループ	
ユーザアカウント/ユーザ	
サービス	
グローバルリソース	新バージョンでサポート終了になったアダプタのグローバルリソースが含まれている場合には、エクスポート対象に含まないでください。
環境変数	
トリガー	エクスポート時の設定において、トリガーの状態を「無効」にしてエクスポートしてください。
休日設定カレンダー	
プロジェクトファイル	サーバに保存されたプロジェクトが対象となります
アプリケーションログ出力設定	
マウント設定	V1.4.0 から選択可能です インポートする際に以下の点を確認してください ・マウント元/マウント先がインポート先に存在する ・マウント元が参照可能になっている
グローバルスキーマ	V1.5.0 からの新機能です
グローバルユーザ定義ロジック	V1.6.0 からの新機能です

2.5 サーバ移行機能で移行できない設定情報の確認

以下の設定情報はサーバ移行の機能では出力できないため、移行を実施する場合には、「3.2.5 移行先環境に本製品に各種設定および各種データの移行を行う」項に従い、移行先環境において再度設定する必要があります。

設定名	設定場所	備考
ローカル保存されたプロジェクト		バージョンアップ前に必ずサーバにコミットするようにしてください。
検索条件	マイログ	リポジトリ DB 有りの場合は移行できます。
DataAnyware 2.0 ログ設定 (圧縮設定・削除設定)	コントロールパネル	
HTTPS の設定	コントロールパネル	
チーム開発機能の設定	コントロールパネル	
最大同時実行数	コントロールパネル	
FTP サーバの設定	コントロールパネル	
マウント設定	コントロールパネル	V1.4.0 からエクスポート可能 V1.4.0 より前のバージョンが該当
lax ファイル内の設定項目	lax ファイル	
アダプタやトリガーのプロパティファイルの設定項目	アダプタやトリガーのプロパティファイル	
DataAnyware 2.0 Studio の 接続先一覧	Studio のログイン画面	
デザイナのレイアウト	デザイナ	

2.6 リポジトリDBの使用有無の確認

リポジトリ DB の使用有無により、環境移行作業の手順が異なります。

リポジトリ DB を使用している場合は、Studio のタイトルバーの末尾に(リポジトリ DB 有り)と表示されます。

また、コントロールパネルの「リポジトリ DB 管理」において、接続しているリポジトリ DB の情報を確認することができます。

3章 環境移行作業

この章では、環境移行作業の実施内容を示します。

3.1 環境移行作業の流れ

環境移行の主な流れは以下となります。

1. 現環境の本製品のバックアップを行う
2. 移行先環境に本製品のインストールを行う
3. 移行先環境にライブラリのインストールを行う
4. 移行先環境に各種設定および各種データの移行を行う
5. 移行先環境にその他設定ファイルの移行を行う

環境移行作業の詳細は、リポジトリ DB の有り・無し、併せてバージョンアップを実施する・しないによって変わります。

以下の一覧から、ご利用状況に合った移行作業を実施してください。

- ・ リポジトリ DB 無し環境の移行作業
- ・ リポジトリ DB 有り環境の移行作業
- ・ リポジトリ DB 無し環境の移行作業（併せてバージョンアップを実施）
- ・ リポジトリ DB 有り環境の移行作業（併せてバージョンアップを実施）

3.2 リポジトリDB無し環境の移行作業

リポジトリ DB を利用しておらず、現環境と移行先環境で同じバージョンの本製品を使用する場合は、以下の手順で移行を行ってください。

3.2.1 現環境で設定情報のエクスポートを行う

サーバ移行機能を利用して、現環境から設定情報をエクスポートします。
設定情報のエクスポートは、以下の手順で実施します。

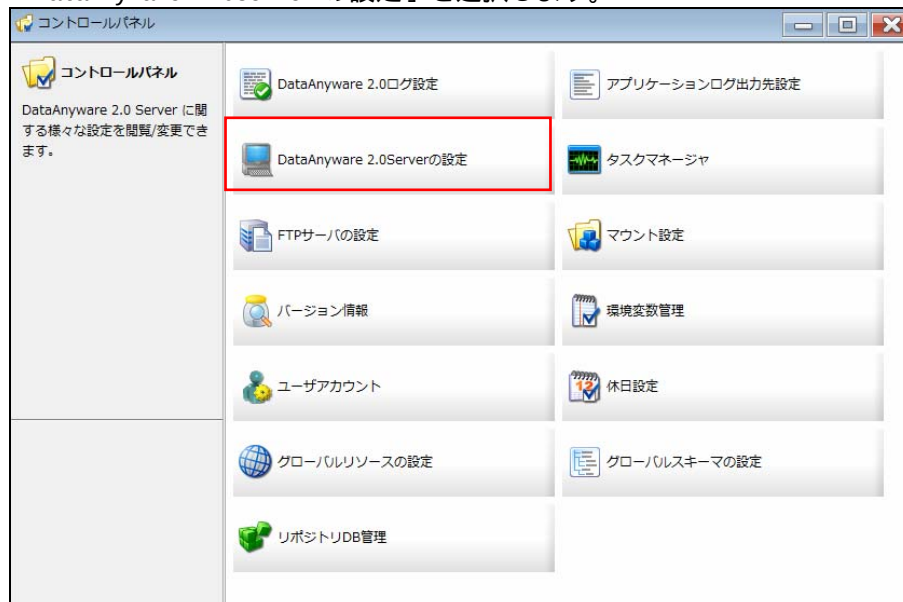


サーバ移行機能を実行する前には、スクリプトが実行されていないこと、他のユーザが DataAnyware 2.0 Studio を使用していないことを確認してください。

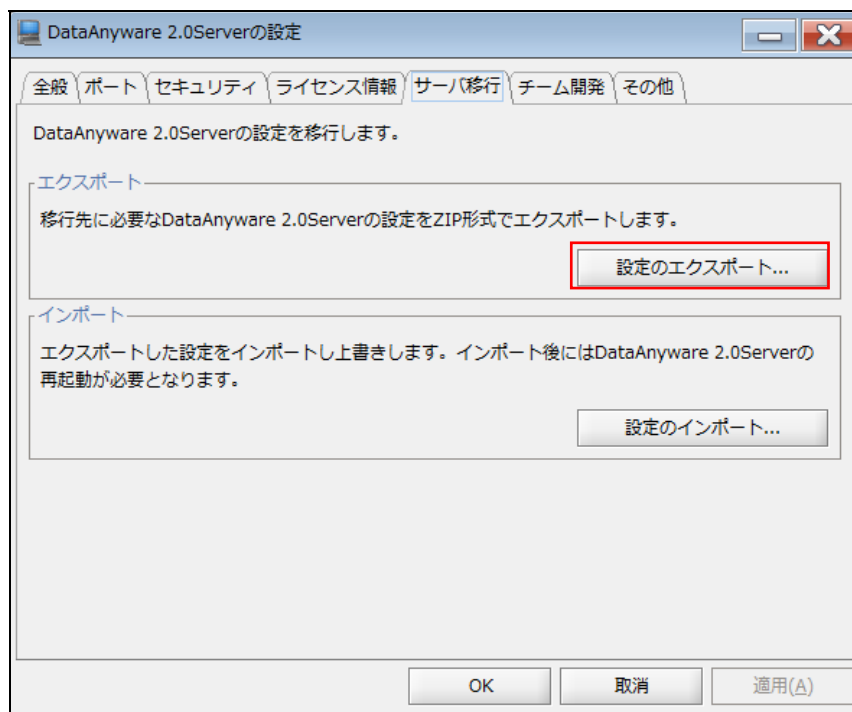
エクスポート対象の量が多い、または規模が大きいと、エクスポートが完了するまで時間がかかる場合があります。

エクスポート項目を絞って数回に分けてエクスポートするなどしてください。

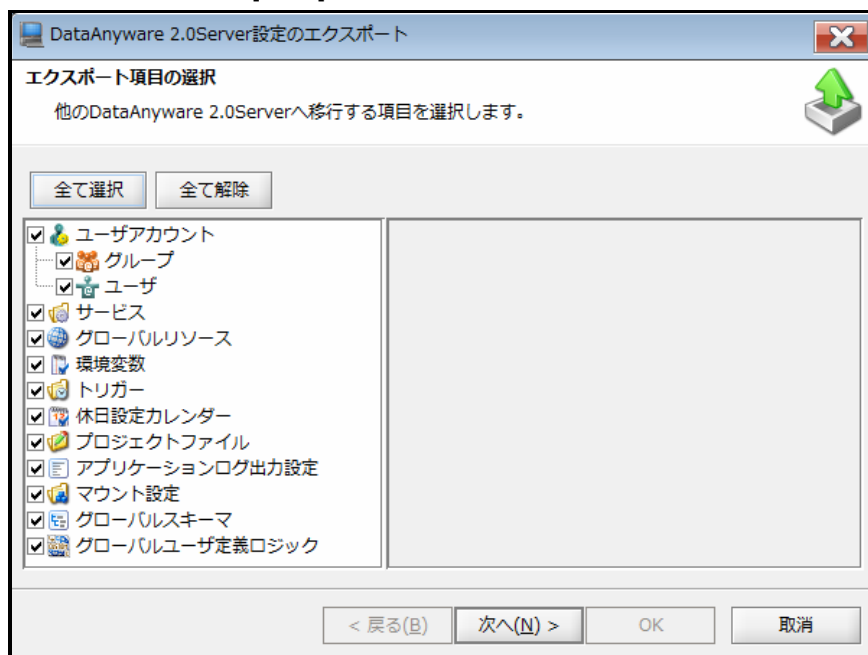
- 1 DataAnyware 2.0 Studio を起動し、コントロールパネルから「DataAnyware 2.0Server の設定」を選択します。



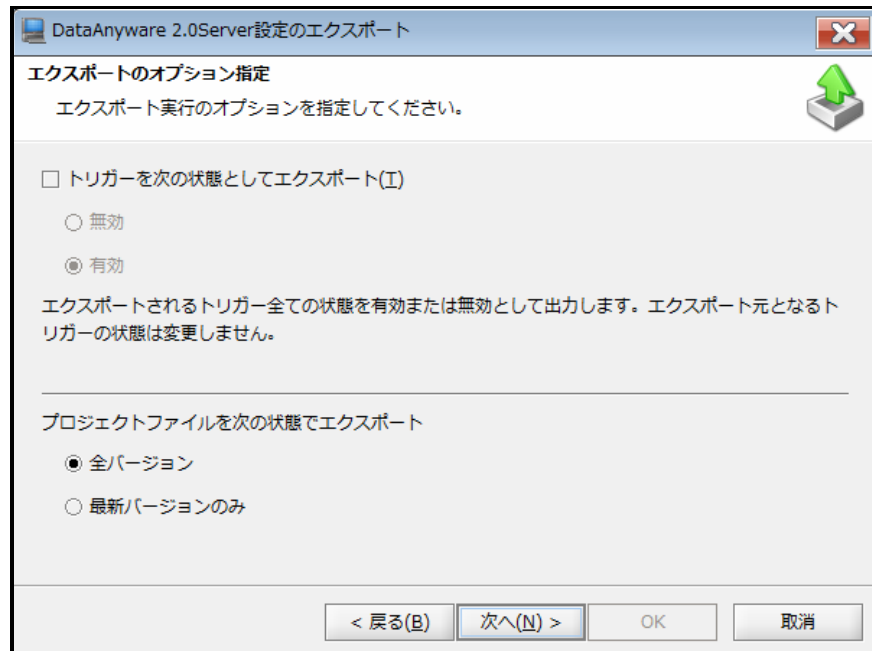
- 2 DataAnyware 2.0Server の設定画面が表示されます。
[サーバ移行]タブを選択し、[設定のエクスポート]ボタンをクリックしてください。



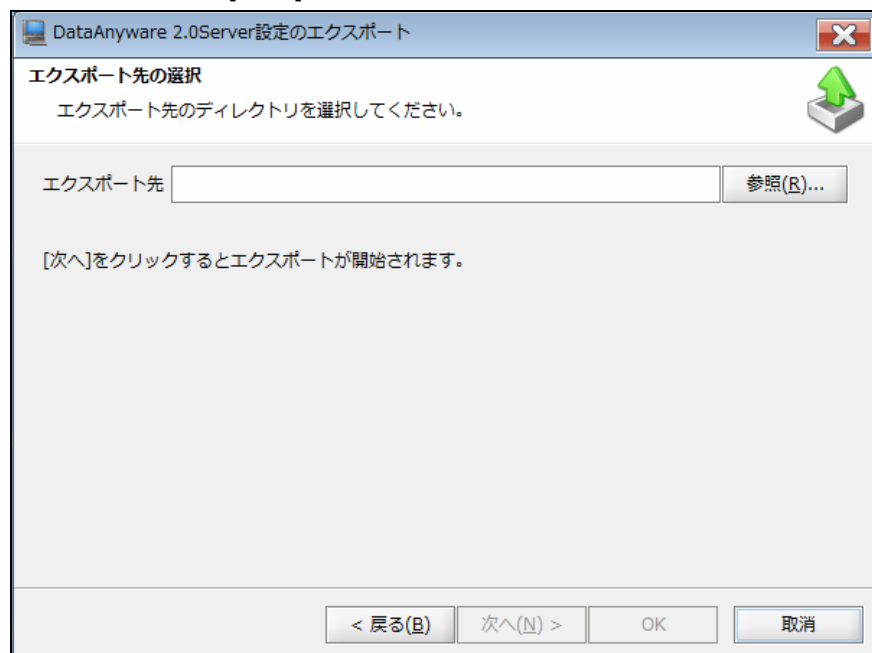
- 3 エクスポート項目の選択画面に遷移します。
エクスポート項目はデフォルトですべての項目にチェックが入っています。
項目を確認した後、[次へ]ボタンをクリックしてください。



- 4 エクスポートのオプション指定画面に遷移します。
- [トリガーを次の状態としてエクスポート]と[無効]にチェックを入れ、トリガーの状態を無効にしてから、[次へ]ボタンをクリックしてください。

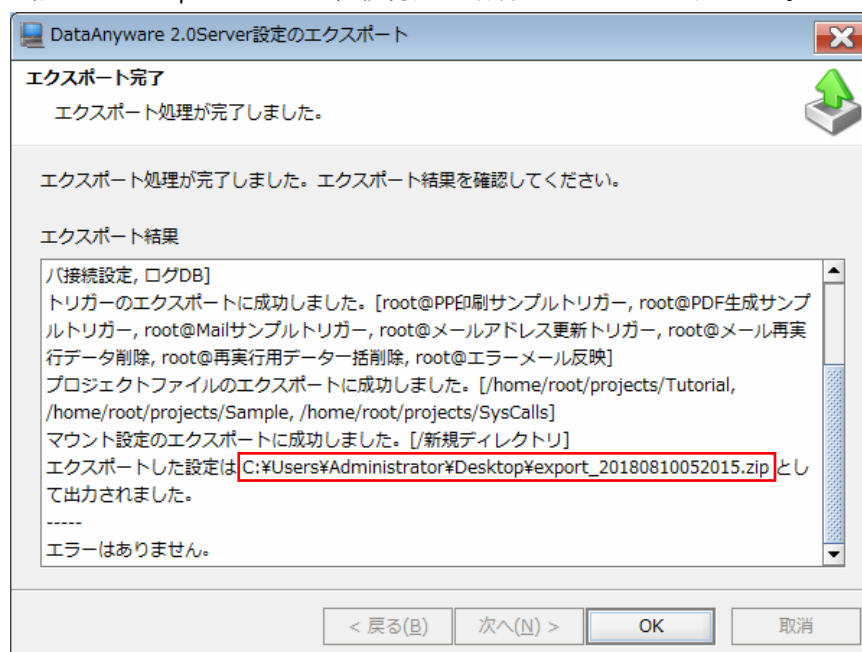


- 5 エクスポート先の選択画面に遷移します。
- 出力先を指定し、[次へ]ボタンをクリックしてください。



	出力先を指定する際、以下の現象が発生する場合があります。 現象が発生した場合には、以下の【回避方法】により現象の回避を行っていただきますようお願いいたします。 【現象】 DataAnyware 2.0 Studio を 64bit アプリケーションとして動作させている場合に発生 「エクスポート先の選択」画面において、プロパティ「エクスポート先」を指定する際、[参照]ボタンをクリックすると、DataAnyware 2.0 Studio が強制終了する 【回避方法】 ・プロパティ「エクスポート先」を手動で入力する 例) C:/tmp C:/tmp ディレクトリに「export_<出力日付> <出力時刻> .zip」の形式で出力されます。 例) export_20180810052015.zip
 注意	出力する情報が多い場合には、処理が完了するまで時間がかかる場合があります。処理は続行されていますので、[取消]ボタンをクリックするなどウィンドウを閉じる動作をしないようにしてください。

- 6 エクスポート処理が正常に終了すると、以下のように表示されます。
出力された zip ファイルを、移行先の環境にコピーしてください。



3.2.2 現環境で管理DBのエクスポートを行う

以下のアダプタを利用している場合は、本製品が利用している DB2 のバックアップファイルを作成してください。

- PrintPro アダプタ
- PrintProPDF アダプタ
- 管理ログ アダプタ

以下の手順で CVDB、DATADB、REFDB の 3 つのデータベースのバックアップファイルを作成します。

- 1 DB2 コマンドウィンドウを起動します。
- 2 db2set DB2CODEPAGE=IBM-943 コマンドを入力します。
- 3 db2 backup database <対象データベース名> to <出力ディレクトリ>
コマンドを、CVDB、DATADB、REFDB の各データベースに対して実行します。

上記手順によるデータの移行は、DB2 のバージョンが現環境と移行先環境において同一であることを前提としています。

3.2.3 移行先環境に本製品のインストールを行う

移行先環境に本製品のインストールを行います。インストール方法については、製品メディアに同梱されたインストールガイドをご確認ください。

3.2.4 移行先環境の本製品にライブラリのインストールを行う

移行先環境の本製品において、グローバルリソースで使用するライブラリをインストールします。

製品ヘルプの各アダプタに[ライブラリのインストール]項が記述されているため、必要なファイル等の詳細についてはそちらをご確認ください。

3.2.5 移行先環境の本製品に各種設定および各種データの移行を行う

現環境の本製品の設定を、移行先環境の本製品に移行します。

移行対象のファイルは、「システム設定ファイル」と「ユーザデータファイル」の2種類となります。

これらのファイルの設定がデフォルトの場合は、作業は不要となります。

1) システム設定ファイル(ファイル内容を変更)

現環境の本製品のフォルダから、以下のファイルの設定を新バージョンの本製品の同名ファイルに移行してください。

ファイルの上書きコピーは行わないでください。

フォルダ	ファイル名	説明
server/conf	dslog.properties	DataAnyware 2.0 Server のログファイルの設定が保存されています。
	system.properties	DataAnyware 2.0 Server のシステム関連の設定が保存されています。
client/conf	dslog.properties	DataAnyware 2.0 Studio のログファイルの設定が保存されています。
	system.properties	DataAnyware 2.0 Studio のシステム関連の設定が保存されています。

2) ユーザデータファイル

現環境の本製品のフォルダ内(server/data フォルダ等)に配置した、スクリプトから参照されるファイルです。

必要に応じて同名フォルダに移行してください。

3.2.6 移行先環境の本製品にその他設定の移行を行う

各種ツールの起動設定ファイル(*.lax)において、メモリ割当値(ヒープサイズ)や標準出力の変更を行っていた場合には、その変更値を新バージョンの同名ファイルに反映させてください。

設定方法の詳細については、製品ヘルプ内[プロパティリファレンス]項をご確認ください。

3.2.7 移行先環境の管理DBにデータの移行を行う

「3.2.2 現環境で管理 DB のエクスポートを行う」項で管理 DB のバックアップファイルを作成した場合には、以下の手順で移行先環境の管理 DB にデータの移行を行ってください。

- 1 DB2 コマンドウィンドウを起動します。
- 2 `cd <フォルダの絶対パス>`
コマンドを実行し、バックアップファイルを配置したフォルダに移動します。
- 3 `db2set DB2CODEPAGE=IBM-943` コマンドを入力します。
- 4 `db2 restore database <対象データベース名>`
コマンドを、CVDB、DATADB、REFDB の各データベースに対して実行します。

上記手順によるデータの移行は、DB2 のバージョンが現環境と移行先環境において同一であることを前提としています。

3.2.8 移行先環境の管理コンソールを起動する

Windows サービスの「DataAnyware 2.0 Admin Console」を起動し、管理コンソールのサービスが開始されることを確認してください。

3.2.9 移行先環境の本製品を起動する

本製品のインストール時に Windows サービスに登録した場合は、Windows サービスの「DataAnyware 2.0」を起動してください。

Windows サービスに登録しなかった場合は、

[本製品インストールディレクトリ]/server/bin フォルダ内の
「DataAnywareServer.exe」を実行してください。

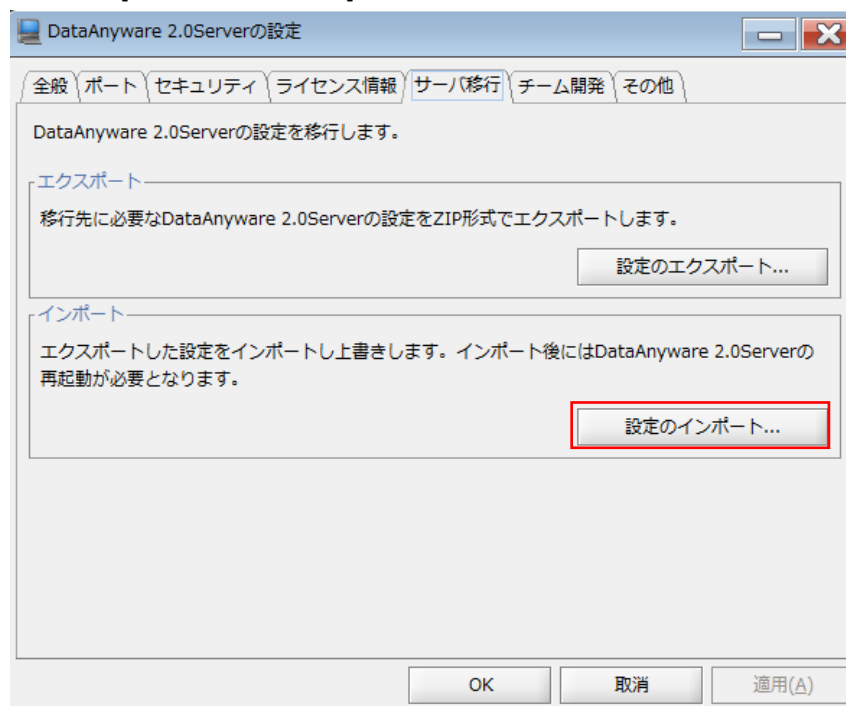
3.2.10 移行先環境の本製品に設定情報のインポートを行う

「3.2.1 現環境で設定情報のエクスポートを行う」項で出力した設定情報を、サーバ移行機能を利用し以下の方法でインポートします。

- 1 DataAnyware 2.0 Studio を起動してログインしてください。
- 2 Studio のコントロールパネルから、「DataAnyware 2.0Server の設定」を選択してください。



- 3 DataAnyware 2.0Server の設定画面が表示されます。[サーバ移行]タブを選択し、[設定のインポート]ボタンをクリックしてください。



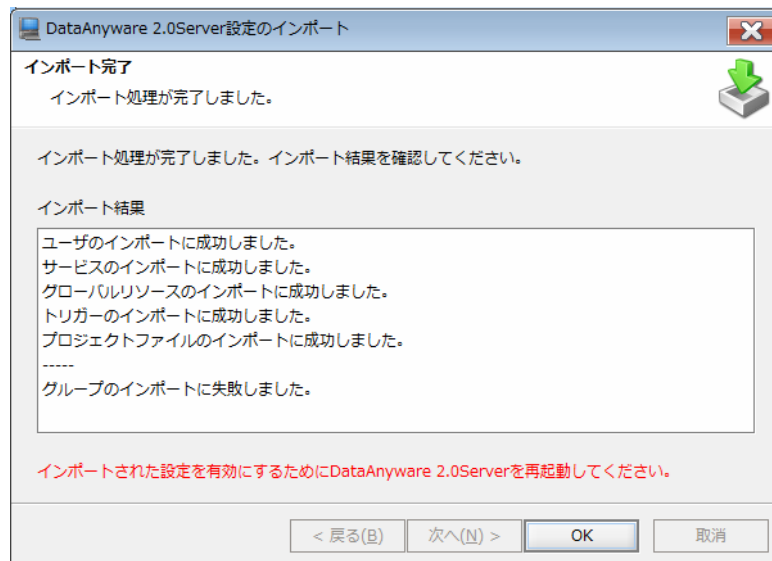
- 4 インポートするファイルの選択画面が表示されます。インポートするファイルを指定し、[次へ]ボタンをクリックしてください。

- 5 インポートが完了すると、インポート完了画面が表示されます。
設定を有効にするために、DataAnyware 2.0 Server を再起動してください。

リポジトリ DB を使用していない環境でインポートを行った際に、
「グループのインポートに失敗しました」と表示される場合があります。

上記メッセージは、リポジトリ DB を使用しない場合にユーザ管理機構
(ユーザやグループの追加) が利用できないため、表示されます。

リポジトリ DB を使用しない場合は、インストール時に作成される root
ユーザーおよび root グループのみを使用するため、影響はありません。



表示内容

マウント設定のインポートを行う際には、事前に移行先環境において、
マウント先に指定するディレクトリの、親ディレクトリが作成されてい
る必要があります。



マウント設定のインポートに失敗した場合、上記の親ディレクトリが作
成されていない可能性があるため、親ディレクトリを作成の上で再度マ
ウント設定のみインポートしてください。

同様に、マウント元のディレクトリが作成されていない場合もインポ
ートの失敗となるため、マウント元のディレクトリを作成の上で再度マ
ウント設定のみインポートしてください。

3.3 リポジトリDB有り環境の移行作業

リポジトリ DB を利用しており、現環境と移行先環境で同じバージョンの本製品を使用する場合は、以下の手順で移行を行ってください。

現環境で利用中のトリガーの停止及び、本製品のサービスを停止できるかにより、手順が以下の2つに分かれます。

- ・ トリガーの停止が行える場合：リポジトリ DB の移行
- ・ トリガーの停止が行えない場合：サーバ移行機能を利用したデータ移行

3.3.1 トリガーの停止が行える場合

現環境で利用中のトリガーが停止できる場合は、以下の手順で移行作業を実施してください。

- 1 現環境の Studio からマイトリガーを選択します。
- 2 [状態]が[待機中]と表示されたトリガーが存在する場合には、メニューの[ツール]から、[トリガーを無効にする]を選択し[状態]を[無効]に切り替えてください。
- 3 現環境の Studio 及び Server を停止します。
- 4 移行先環境のリポジトリ DB として使用するデータベースにおいて、リポジトリ DB 用のユーザを作成します。
- 5 現環境のリポジトリ DB として使用しているデータベースインスタンスのテーブルを、移行先環境のデータベースに移行します。

移行方法はリポジトリ DB として使用するデータベースの種類によって異なるため、各データベースが推奨する移行手順にしたがって、実行してください。

- 6 以降の手順は、「3.2.2 現環境で管理 DB のエクスポートを行う」項以下を参照してください。

「3.2.3 移行先環境に本製品のインストールを行う」項において、リポジトリ DB の設定を移行先環境に移行したリポジトリ DB としてください。

リポジトリ DB の移行を行う場合は、サーバ移行機能を利用した設定情報のエクスポート・インポートは実施しません、ご注意ください。

3.3.2 トリガーの停止が行えない場合

現環境のトリガーが停止できない場合には、リポジトリ DB を直接移行せず、「3.2 リポジトリ DB 無し環境の移行作業」項に沿って行い、サーバ移行機能を使用した設定情報の移行を行います。

「3.2.3 移行先環境に本製品のインストールを行う」項において、リポジトリ DB の設定を、移行先環境に作成したリポジトリ DB としてください。

リポジトリ DB が有効になった状態の移行先環境の本製品に対して、サーバ移行機能を使用して設定情報の移行を行う事で、移行先環境のリポジトリ DB に移行した情報が書き込まれます。

3.4 リポジトリDB無し環境の移行作業(併せてバージョンアップを実施)

移行先環境に導入予定の本製品と、現環境の本製品のバージョンが異なり、かつ現環境の本製品のバージョンアップを実施しない場合は、以下の手順で移行作業を実施してください。

主な流れは「3.2 リポジトリ DB 無し環境の移行作業」と同じとなりますが、サポートが切れたグローバルリソースが含まれている場合には、移行先環境の本製品において再作成が必須となるため、関連する手順が追加されています。

3.4.1 現環境でグローバルリソースの一覧を記録する

「2.3 利用中のコンポーネントの確認」項を参考に、バージョンアップ後にサポートが切れるグローバルリソースが含まれている場合には、設定情報のエクスポート時にグローバルリソースを含めず、移行先環境の本製品において全て再作成する必要があります。

そのため、全てのグローバルリソースをサポートの範囲内・外に依らず、テキストエディタ等で手作業にて一覧として記録してください。

一覧を記録する際には、各グローバルリソースのプロパティ(接続先の URL やデータベース名等)に加えて、サポートが切れたグローバルリソースをどのバージョンに切り替えるか(例: DB2 9.7 を DB2 11.1 に変更する)についても併せて記載することを推奨します。

特に「リソース名」については、同名のグローバルリソースを再作成の際に誤った内容で作成した場合に、スクリプトが動作しない等のトラブルが発生する可能性があるため、細心の注意を払って記録してください。

3.4.2 現環境で設定情報のエクスポートを行う

「3.2.1 現環境で設定情報のエクスポートを行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

なお、「3.4.1 現環境でグローバルリソースの一覧を記録する」項で一覧を作成した場合は、グローバルリソースをエクスポート対象から外した上で設定情報のエクスポートを実施してください。

移行先環境の本製品に対して、サポートが切れたグローバルリソースのインポートを行った場合、データに不整合が発生し本製品の再インストールが必要となる可能性があるため、必ずグローバルリソースを除いてエクスポートを実施してください。

3.4.3 現環境で管理DBのエクスポートを行う

「3.2.2 現環境で管理 DB のエクスポートを行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.4 移行先環境に本製品のインストールを行う

「3.2.3 移行先環境に本製品のインストールを行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.5 移行先環境の本製品にライブラリのインストールを行う

「3.2.4 移行先環境の本製品にライブラリのインストールを行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.6 移行先環境の本製品に各種設定および各種データの移行を行う

「3.2.5 移行先環境に本製品に各種設定および各種データの移行を行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.7 移行先環境の本製品にその他設定の移行を行う

「3.2.6 移行先環境の本製品にその他設定の移行を行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.8 移行先環境の管理DBにデータの移行を行う

「3.2.7 移行先環境の管理 DB にデータの移行を行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.9 移行先環境の管理コンソールを起動する

「3.2.8 移行先環境の管理コンソールを起動する」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.10 移行先環境の本製品を起動する

「3.2.9 移行先環境の本製品を起動する」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.11 移行先環境の本製品に設定情報のインポートを行う

「3.2.10 移行先環境の本製品に設定情報のインポートを行う」項と同一の内容となるため、そちらをご参照ください。

3.4.12 移行先環境の本製品でグローバルリソースの再作成を行う

「3.4.1 現環境でグローバルリソースの一覧を記録する」項において記録したグローバルリソースの一覧を基に、グローバルリソースの再作成を行ってください。

再作成を行う際には、接続先のバージョンと一致するアダプタを選択してグローバルリソースを作成してください。

グローバルリソースの作成時に、サポートするバージョンのアダプタが表示されない場合は、必要となるライブラリがフォルダに配置されていない可能性があります。

製品ヘルプの[ライブラリのインストール]項を参考に、指定されたフォルダにライブラリを配置してください。

ライブラリの配置後には、本製品の Server の再起動が必要となります。

3.4.13 移行先環境の本製品でODBC接続関連の確認を行う

本製品のバージョン 1.5.0 より、Access アダプタ、SQL Server(ODBC)アダプタ、ODBC アダプタにおいて、「JDBC Proxy Server」を経由して ODBC データソースへの接続を行うように変更が加えられております。

そのため、上記 3 アダプタを使用しており、ドライバタイプの項目に ODBC が指定されたグローバルリソースが存在する場合には、プロパティの内容が自動的に「JDBC Proxy Server」に変更されております。

プロパティの内容が自動的に変更された場合、接続先として「localhost」が指定されるため、「JDBC Proxy Server」を別環境に導入した場合には、接続先を変更してください。

3.5 リポジトリDB有り環境の移行作業(併せてバージョンアップを実施)

リポジトリ DB を利用しており、移行先環境に導入予定の本製品と、現環境の本製品のバージョンが異なり、かつ現環境の本製品のバージョンアップを実施しない場合は、以下の手順で移行作業を実施してください。

現環境で利用中のトリガーの停止及び、本製品のサービスを停止できるかにより、手順が以下の 2 つに分かれます。

また、サポートが切れたグローバルリソースの有無により、手順の内容が一部異なります。

- ・ トリガーの停止が行える場合：リポジトリ DB の移行
- ・ トリガーの停止が行えない場合：サーバ移行機能を利用したデータ移行

3.5.1 トリガーの停止が行える場合

現環境でトリガーの停止が行える場合には、「3.3.1 トリガーの停止が行える場合」と同一の内容で移行作業を実施するため、そちらをご参照ください。なお、サポートが切れたグローバルリソースが存在する場合には、**現環境で該当するグローバルリソースを削除する必要があります。**

その場合には、「3.5.2 トリガーの停止が行えない場合」項を参照してください。

3.5.2 トリガーの停止が行えない場合

現環境のトリガーが停止できない、もしくはサポートが切れたグローバルリソースの削除が行えない場合には、リポジトリ DB を直接移行せず

「3.4 リポジトリ DB 無し環境の移行作業(併せてバージョンアップを実施)」項に沿って行い、サーバ移行機能を使用した設定情報の移行を行います。

「3.4.3 移行先環境に本製品のインストールを行う」項において、リポジトリ DB の設定を、移行先環境に作成したリポジトリ DB としてください。

リポジトリ DB が有効になった状態の移行先環境の本製品に対して、サーバ移行機能を使用して設定情報の移行を行う事で、移行先環境のリポジトリ DB に移行した情報が書き込まれます。

4章 動作確認

この章では、環境移行後の動作確認の実施内容を示します。

4.1 管理コンソールの動作確認

管理コンソールの動作確認として、以下を実施してください。

- 1 Windows のプログラムと機能の一覧に表示されるバージョン表記が、使用したインストーラーのバージョンと一致することを確認してください。
- 2 ログイン画面に表示されるバージョン表記が、使用したインストーラーのバージョンと一致することを確認してください。
- 3 ログインが可能か確認してください。
- 4 ログの一覧等、各種リストが正常に表示されていることを確認してください。
- 5 画面に文字化け等が発生していないことを確認してください。

4.2 本製品の動作確認

本製品の動作確認として、以下を実施してください。

- 1 Windows のプログラムと機能の一覧に表示されるバージョン表記が、使用したインストーラーのバージョンと一致することを確認してください。
- 2 Studio のコントロールパネルから「バージョン情報」を選択し、表示された画面内のインストーラバージョンのサーバ・クライアントの項目に、「DataAnyware 2.0 <インストールしたバージョン>(ビット数)」と表示されていることを確認してください。
- 3 移行したプロジェクト、マイトリガー、グローバルリソースの一覧が表示されることを確認してください。
- 4 移行したグローバルリソースに対し、テスト接続が成功することを確認してください。

5章 トラブルシューティング

この章では、作業時に発生する問題とその対応を示します。

5.1 移行作業中に発生する問題

■ ユーザ情報のインポートに失敗する

ユーザの作成にはリポジトリ DB を適用している必要があります。

リポジトリ DB が適用されているかを確認し、再度インポートを実行してください。

■ 移行先環境へデータを移行後、特定のグローバルリソースが表示されない

・グローバルリソースに必要なライブラリが配置されていない可能性があります。
「3.2.4 移行先環境の本製品にライブラリのインストールを行う」項を実施しているか確認してください。

・該当のグローバルリソースが移行先環境の製品バージョンで対応していない可能性があります。

「2.5 利用中のコンポーネントの確認」に該当していないか確認してください。

■ 移行先環境へデータを移行後、特定のプロジェクトが表示されない

インポート時にエラーが発生していた可能性があります。

現環境の DataAnyware 2.0 Studio を起動し、[マイプロジェクト]から該当プロジェクトのエクスポートを行い、個別のインポートを実施して現象が回避されるか確認してください。

■ 移行されたプロジェクト内容が異なる

ローカル保存されたプロジェクトが存在している可能性があります。

チーム開発機能を使っていないかを確認した後、該当のプロジェクトがコミットされているかを確認してください。

■ 製品が起動しない

設定ファイルを現環境のファイルで上書きしている、または不正に修正している可能性があります。

「3.2.5 移行先環境の本製品に各種設定および各種データの移行を行う」項および「3.2.6 移行先環境の本製品にその他設定の移行を行う」を再度実施し、現象が回避されるか確認してください。

■ データ移行時、マウントのインポートに失敗する

・マウント先に指定するディレクトリの、親ディレクトリが作成されているか確認した上で、再度マウント設定のみインポートしてください。

・マウント元のディレクトリが作成されているか確認した上で、再度マウント設定のみインポートしてください。

環境移行ガイド

第 1 版 2018 年 12 月 19 日

発行 JB アドバンスト・テクノロジー株式会社

お問い合わせ 弊社ホームページより、お問い合わせください。
<http://www.jbat.co.jp/>

本書は著作権上の保護を受けており、本書の全部あるいは一部に関して、JB アドバンスト・テクノロジー株式会社からの文書による許諾を得ず、無断で複写、複製することは禁じられています。また、本書はユーザーへ通知することなく変更される場合があります。